

## 煩惱まみれの修行僧。宿泊体験にきたJKに、わいせつ行為

助平寺は、仏教の宗派の一つ、S宗の大本山のお寺だ。

世界各地からの観光客が助平寺には大勢、訪れている。

助平寺では、宿泊体験も行っていた。

宿泊客が、宿坊体験をし、寺に泊まっていく。

高校生が宿坊体験に訪れることもある。

仏教系の高校を中心に、全国各地の高校生が、助平寺にやってくる。

学年全員でやってくる学校もあれば、希望者のみの数十人でやってくる高校など様々あった。

助平寺の若手修行僧、沈陳(ちんちん)は、この高校生が宿坊体験に来ることをいつも楽しみにしていた。

現役の女子高校生が助平寺に来て、一泊する。沈陳は助平寺の中で、若手の修行僧だったので、いつも高校生たちのお世話係を命じられていた。

お世話するということは、高校生たちと一番近いところで触れあえるということだ。

沈陳は煩惱丸出しで、チャンスがあれば、女子高校生たちに様々なイタズラをしていた。

仏道に入ったとはいえ、沈陳はまだまだ血気盛んな20代の若者だ。

沈陳のちんちんは、いつも溢れんばかりにいい匂いを放っている現役 JK たちを目の前にして、爆発寸前だった。

この日も、A 県から T 高校の高校生たちが、学年全員でやってきた。

全国各地の高校からやってくる女子高生たち。沈陳は助平寺にやってくるすべての女子高生たちを、ただただエロい視線で性的に見ていた。

現役女子高校生たちを性的に見るなということの方が難しい。

煩悩を捨て去るには、まずは煩悩をしっかりと理解することが大切だと沈陳は思っていた。

助平寺に到着した高校生たちは、開講式を終え、座禅体験をし、その後、写経を始めた。

その後、もう一度、座禅体験が始まった。

静まり返った雰囲気の中、一人の女子生徒がふらふらと体を揺り動かし始めた。

足がしびれているだけかと思われたが、そのまま、ばたんと倒れてしまった。

沈陳ら、修行僧たちが、その女子生徒の近くに集まってくる。

付き添いで来ている先生も何人か集まってきた。

「宮出さん、大丈夫？」

女性教師が声をかけた。

宮出さんは返事できなかった。

ぐったりとうなだれている。

宮出さんは、どちらかというと小柄な女子生徒だった。

黒髪で真面目そうな生徒で、特徴がないといえないけど、ある意味で女子高校生らしい女子高生だともいえた。

こういう取りたてて特徴のない、地味目な真面目そうな女子生徒は、沈陳が一番ターゲットにしているタイプだ。

「一旦、休憩所に移動させましょう」

修行僧のリーダーがそう言った。

「誰か生徒さんをはこんでくれるか」

「はい、私がやります」

沈陳が真っ先に手を挙げながら言った。

チャンス到来だ。

現役 JK に合法的に触れられる機会をエロ修行僧、沈陳が逃すはずはなかった。

おんぶするような格好で、沈陳は宮出さんを背中におぶった。

周りの高校生たちが、心配そうな目で眺めている。

宮出さんのやわらかな肉体の感触が沈陳のちんちんを刺激する。

女子高生の確かなメスの香りが漂ってくる。

宮出さんのおっぱいが、沈陳の背中にやわらかく当たっていた。

沈陳のちんちんは、すでに勃起し始めていたけど、ゆったりとした袈裟姿のため、勃起を悟られることはない。

「じゃあ、沈陳、頼んだぞ」

リーダーにそう言われ、沈陳は休憩所へ向け

て歩き出す。

「私も一緒にいきましようか？」

女性教員が沈陳に尋ねた。

「いえ、大丈夫です。しばらく休ませてみて、みなさんに合流できるようであれば、合流させます。それまでは私が見ておきますので」

沈陳は微笑みをたたえながら、そう言い、歩き出した。

沈陳と宮出さんは休憩所に到着した。

休憩所といっても、小さい部屋に布団が敷いてあるだけだ。

座禅中に気分が悪くなる人はたまにいますので、そういう人が出たときにとりあえず、この部屋に移動させることになっている。

沈陳は宮出さんを仰向けに寝かせた。

沈陳は、まじまじと宮出さんの全身をねっとりと眺めてみた。

宮出さんのおっぱいは意外と大きかった。

カッターシャツの胸の部分がはっきりとわかるくらいに膨らんでいる。

白いスポーツブラを装着しているのが透けて見えた。

宮出さんはうっすらと汗をかいていた。

沈陳はうちわを持ってきて、宮出さんを仰いであげた。

宮出さんの呼吸が少しずつ、安定しだしてきた。あー、この子にキスしたいな、しようかなと沈陳は思った。

「失礼します。どうですかー？」

そう言って、さっきの女性教師が休憩所に入ってきた。

任せておけと言ったはずなのにと、沈陳は少し苛立った。

「あ、先生。少しずつ落ち着いてきたみたいです。汗も引いてきているので、もう少ししたら戻れると思います」

沈陳はまた、微笑みながら、そう言った。

「そうですか。じゃあ、引き続きお願いしていても大丈夫でしょうか」

「はい、もちろんです。任せてください」

「じゃあ、すみません。よろしくお願いします」

女性教員が戻っていった。

沈陳は心の中でガッツポーズした。

一度様子を見に来たことで、しばらくは確実に誰もこないだろう。

しばらくは、ここで沈陳と宮出さんは二人っきりとなる。

宮出さんを思う存分堪能できると、沈陳は思った。

「体調が戻るように少し体をさするね」

沈陳はそう言い、宮出さんの二の腕をさすり始めた。

半袖のカッターシャツなので、二の腕は丸出しだ。

その瑞々しい二の腕を沈陳は、ぷるんぷるんと揉みしだいていく。

宮出さんは体を硬直させた。

体の硬直が沈陳に伝わってきた。

沈陳はその硬直を解きほぐすように念入りに